

カジマヤーと 模擬葬式

十月、町内では十六名もの方がカジマヤーを迎えられました。去年（九名）や一昨年（九名）に比べると倍近い方々が約一世紀もの歳月を生きられるなんてすばらしいことですし、また、私たち町民にとって誇らしいことでもあります。



カジマヤーとは、数え九十七歳のトゥシビーのことを言います。通常、トゥシビーはその年の正月初めの同じ十二支の日にお祝いが行われますが、カジマヤーの場合は九十七歳のお祝いということで、旧暦九月七日に行われています（八十八歳のトーカチも同様に旧暦八月八日に行われる慣わしがあります）。その語源は、老齢になれば童心にかえってカジマヤー（風車）で遊ぶためとか、七つのかジマヤー（十字路）を通るためとか言われています。今日ではオーブンカーに乗って町内をパレードした後、公民



カジマヤーのパレードの様子
(2005年 小那覇区 新川朝保さん)

館で祝賀会が開かれるなど長寿祝いとして盛大に行われている場合がほとんどですが、『西原町史』を読むと、現在ではあまり行われていない儀礼があることがわかります。それは模擬儀礼、あるいは模擬葬式とよばれる儀礼です。



前日の夜、葬式に見立てた飾り物をつくり、本人に死装束を着させ、手拭をかぶせて身内、親戚が泣くという模擬葬式が、かつては行われていました。そして、当日は前夜とうって変わって、晴れやかな衣装を

身にまとい、盛大なお祝いが催されたといえます。こうした儀礼は、かつてはトーカチ（八十八歳）やその前のトゥシビーから行われていたようで、森川、池田では七十三歳から行われていたようです。

それにしても、何故、お祝いの時に模擬的とはいえこのようなことを行うのでしょうか。いくつかの考え方がありますが、そのうちの一つに「死と再生が象徴されている」というものがあります。おそらく、生き返ること再び長生きする、長生きして欲しいという願いを込めたのかもかもしれません。「内間、池田では〈生まれ変わってくる〉という言葉を含めて、こうした儀礼を行った」と『西原町史』では解説されています。

とはいえ、やはり快いものとは言い難く、時代が流れるにつれ模擬葬式を本人や家族が嫌って避けるようになり、ほとんど見られなくなりました。しかし、近年著名人を中心に「生前葬」を行う人が出てきており、葬式のイメージが少しずつ変わってきているのかもしれない。

★トゥシビー

トゥシビーとは、自分の生まれた年と同じ十二支の年（生まれ年）の旧暦正月最初の同じ十二支の日に、無病息災を火の神などに願ひ祝うことを言い、生年祝いとも言います。生まれ年は十二年ごとにまわってくるので、数え十三歳、二十五歳、三十七歳、四十九歳、六十一歳、七十三歳、八十五歳、九十七歳、さらに十二支とは関係のない八十八歳に生年祝いが行われます。また、生まれ年は厄年とも言われ、かつては生まれ年に家の新築や結婚を避けていたそうです。

よく「女の厄年は数え十九歳、三十三歳、三十七歳。男の厄年は数え二十五歳、四十二歳、六十一歳」と耳にします。これは本土で一般的に言われている厄年を指し、陰陽道の影響を受けていると言われています。

写真提供

企画財政課

参考文献

西原町史編集委員会『西原町史第四巻』

沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』

源武雄『琉球歴史夜話』

民俗学研究所『民俗学辞典』

『広報』2004年11月号、

2003年11月号